様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　23　年　6　月　7　日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(B)
研究期間：2008～2010
課題番号：２０３３００２５
研究課題名（和文）　政治における暴力の複合的研究

研究課題名（英文）　A multifaceted research on political violence

研究代表者
大串　和雄　(OHGUSHI KAZUO)
東京大学・大学院法学政治学研究科・教授
研究者番号：９０２１１１０１

研究成果の概要（和文）：本研究は、複雑化を増す現代世界における政治的暴力の力学解明を試みた。取り上げた課題は主として以下の通りである。(1)グローバル化時代の暴力に関する政治理論的考察、(2)民族浄化の概念とメカニズム、(3)パレスチナ解放闘争におけるアラブ・ナショナリズムと個別国家利害の相克、(4)犯罪対策と治安セクター改革におけるインドネシア軍の利益の維持・拡大、(5)グアテマラにおける政治的暴力、(6)アフリカ諸国における民兵、(7)ビルマ難民の民主化闘争における非暴力の位置づけ、(8)ラテンアメリカの移行期正義。

研究成果の概要（英文）：This project attempted to elucidate the dynamics of political violence in the increasingly complex world.　The following were the main subjects of research: 1) a reflection on violence in the globalization era from the perspective of political theory; 2) the concept and dynamics of ethnic cleansing; 3) the conflict between Arab nationalism and national interests in the Palestinian liberation struggle; 4) the Indonesian military's promotion of their interests in crime control and security sector reform; 5) political violence in Guatemala; 6) militias in Sub-Saharan Africa; 7) violence and non-violence in the democratization strategy of Burmese refugees; and 8) transitional justice in Latin America.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	5,200,000	1,560,000	6,760,000
2009 年度	4,600,000	1,380,000	5,980,000
2010 年度	4,600,000	1,380,000	5,980,000
年度			
年度			
総　計	14,400,000	4,320,000	18,720,000

研究分野：比較政治、ラテンアメリカ政治
科研費の分科・細目：政治学・政治学
キーワード：暴力、紛争、民族紛争、民兵

１．研究開始当初の背景

本研究プロジェクトは、日本政治学会機関誌『年報政治学』2009 年度第Ⅱ号に研究成果の一部を掲載することを直接の目的として組織された。言うまでもなく、広義の政治的暴力（民族・宗教を主たる争点とする紛争も含む）のコントロールは、複雑化を増す現代世界が直面する最も重要な課題の一つである。本研究は、政治学の立場から、現代世界における政治的暴力の諸相に多角的に光を当てようとしたものである。

２．研究の目的

本研究プロジェクトは、主として以下の問題の解明に取り組んだ。

(1) 政治と暴力に関する政治理論的研究を手

がかりとして、グローバリゼーションが深化する現代世界における多様な暴力の噴出をいかに理解することが可能か。現代における政治と暴力の関係はいかなるものか。暴力の克服はいかにして可能か。
(2) 旧ユーゴスラビア紛争で一躍有名になった「民族浄化」という概念は先行研究でどのように扱われているか。ボスニア内戦において民族浄化はいかなる力学で進展したか。
(3) パレスチナ解放闘争において、アラブ諸国の共通の利害を強調するアラブ・ナショナリズムとアラブ諸国・PLO の個別利害の相克は、どのように推移してきたか。
(4) インドネシアでは、1998 年のスハルト長期政権の崩壊後、国軍が政治の前面から退き、守勢に立たされたが、犯罪対策や治安セクター改革(SSR)という新たなアジェンダの中で、軍の特権はいかに維持されているのか。
(5) グアテマラの政治的暴力はどのように展開したか。紛争終結後、暴力の状況はいかに変化したか。
(6) 紛争が多発するサハラ以南のアフリカ諸国で、民兵と呼ばれる武装集団の存在が近年顕著であるが、一般的に民兵とはいかなる概念であるか。またアフリカ諸国における民兵とはどのような存在か。
(7) 1962 年以来軍が実質的に権力を独占しているビルマ（ミャンマー）の内外では、民主化を求めるビルマ国民が抵抗運動を展開しているが、非暴力活動を展開するグループ（NLD、その他）と、タイ側で軍事的抵抗を続けるグループ（旧学生戦闘組織 ABSDF、カレン民族政治団体 KNU、その他）のそれぞれは、民主化と暴力との関係に関してどのように考えているのか。
(8) ラテンアメリカでは 1970 年代末から徐々に民主化と内戦終結が実現し、過去の人権侵害や人道犯罪への対処が政治的争点となってきたが、今日、ラテンアメリカの移行期正義はいかなる状況にあるか。

３．研究の方法

上記の研究テーマについて、研究代表者・研究分担者・連携研究者がそれぞれ、文献調査、現地調査、研究者との情報交換などの方法で研究に従事した。また、定期的に研究会合宿を組織し、地域間比較等について徹底的討論を行なった。研究会合宿には適宜ゲスト研究者を招き、研究プロジェクトメンバーによる研究報告に対するコメント・討論を依頼するとともに、一部のゲストには関連するテーマに関する報告も依頼した。

４．研究成果

(1) グローバル化する世界の中で噴出する多様な暴力に対して政治理論の視角から分析を深めた。政治思想史の中から、暴力と「政治」の対立関係を見いだし、政治の復権に暴力克服の鍵があるという結論に至った。
(2) 「民族浄化」という言葉の定義を、ジェノサイドやエスノサイドといった類似概念との比較を踏まえながら考察した。またボスニア内戦を例に取り、民族浄化の実行者、民族浄化の動機、民族浄化へと向かう集団的感情の動き、民族浄化の遺産などについて分析した。
(3) パレスチナ解放闘争を世界秩序の変革をめざす革命の一種として捉え、それが行き詰まっていくプロセスを分析した。そした、一方におけるアラブ・ナショナリズムや反帝国主義イデオロギーと、他方におけるアラブ諸国政府およびパレスチナ解放勢力の個別利害とを区別し、前者に対して後者が次第に優位に立っていくプロセスを析出した。
(4) スハルト独裁政権の崩壊後、スハルト体制を担ってきた陸軍は、治安セクター改革によって国内治安から閉め出されることになり、組織利益を脅かされた。しかし陸軍は、越境犯罪やテロリズムに対する国際社会の懸念を利用し、それらに対する戦いを口実にして、権限の再拡張に成功した。しかも、犯罪の増加の根底には陸軍（および警察）自身の犯罪へ関与があるにも拘らず、陸軍は問題をキャパシティ不足にすり替え、新たな資源の獲得にさえ成功している。以上のことを実証的に解明した。
(5) 20 世紀後半のグアテマラにおける政治的暴力のエスカレーションと、内戦後の真相究明・国家補償をめぐる政治を分析するとともに、内戦後に犯罪が急増し、そこに元軍人・警察官、元ゲリラ、元先住民自警団幹部などが関わっていることを指摘した。
(6) 民兵の概念を整理するとともに、アフリカ諸国で近年、政府が内戦で民兵を利用する傾向があることに注目し、それらの政府が民兵を利用する理由を、ポストコロニアル家産制国家の解体に見出した。
(7) ビルマで軍事政権に反対する人びとから圧倒的な支持を得ているアウンサンスーチーは、非暴力的抵抗を唱道している。タイに逃れて民主化運動を展開するビルマ人活動家がアウンサンスーチーの思想をどのように理解し、民主化運動における暴力・非暴力の問題をどう考えているのかについて、タイにおけるインタビューに基づいて分析した。
(8) ラテンアメリカにおける移行期正義の過去 10 年間の動きを整理した。また、ペルーにおけるフジモリ元大統領に対する多数の訴追案件を整理し、現状を把握した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 22 件）

(1) 月村太郎「バルカン地域における非バルカン化―旧ユーゴ後継諸国の現状と展望を中心に」『同志社政策研究』第 5 巻、2011 年、pp.89-106.　査読有。

(2) 武内進一「コンゴ東部紛争の新局面」『国際政治』第 159 号、2010 年、pp.41-56.　査読有。

(3) 大串和雄「民主化・内戦後の司法に課せられるもの―フジモリ裁判と世界の潮流」『立教大学ラテンアメリカ研究所報』第 38 号、2010 年、pp.7-19.　査読無。

(4) 月村太郎「民族浄化(ethnic cleansing)について―ボスニア内戦を念頭に」『年報政治学』2009-II、2009 年、pp.31-49.　査読無。

(5) 本名純「インドネシアにおける『犯罪との戦い』―非国家主体の暴力をめぐる治安機構の政治」『年報政治学』2009-II、2009 年、pp.70-86.　査読無。

(6) 根本敬「ビルマ民主化運動における暴力と非暴力：アウンサンスーチーの非暴力主義と在タイ活動家たちの理解」『年報政治学』2009-II、2009 年、pp.129-149.　査読無。

(7) 狐崎知己「現代グアテマラにおける政治暴力の変容」『年報政治学』2009-II、2009 年、pp.87-107.　査読無。

(8) 木村正俊「国際革命としてのパレスチナ革命―展開と解体」『年報政治学』2009-II、2009 年、pp.50-69.　査読無。

(9) 武内進一「政権に使われる民兵―現代アフリカの紛争と国家の特質」『年報政治学』2009-II、2009 年、pp.108-128.　査読無。

(10) 月村太郎「エスニック紛争の構図―発生、激化・拡大、予防・解決」『同志社政策研究』第 4 巻、2009 年、pp.24-45.　査読有。

(11) 千葉眞「政治と暴力――一つの理論的考察」『年報政治学』2009-II、2009 年、pp.11-30.　査読無。

(12) Shinichi Takeuchi and Jean Marara, “Conflict and Land Tenure in Rwanda,” JICA-RI Working Paper, no.1, 2009. pp.1~30. 査読有。

(13) 月村太郎「多民族国家建国の困難―ボスニアを例として」『同志社政策研究』第 3 巻、2009 年、pp.121-140.　査読有。

(14) Jun Honna, “The Peace Dividend,” *Inside Indonesia*, no.92, 2008, pp.1-3. 査読有

(15) Jun Honna, “Instrumentalizing Pressures, Reinventing Mission: Indonesian Navy Battles for Turf in the Age of *Reformasi*,” *Indonesia*, no.86, 2008, pp.63-80.　査読有。

(16) 大串和雄「ペルーにおける人権運動の考察」『国家学会雑誌』第 121 巻第 5・6 号、2008 年、pp.1-34、および第 121 年第 7・8 号、2008 年、pp.1-42.　査読無。

〔学会発表〕（計 39 件）

(1) Jun Honna, “Mainstreaming Human Security Approach in ASEAN’s Anti-Human Trafficking Agenda: Civil Society Involvement and its Challenges,” International Workshop “ASEAN ISIS-JICA Research Project on Mainstreaming Human Security in ASEAN Integration,” JICA Research Institute, Tokyo, October 31, 2010.

(2) 本名純「『麻薬との戦い』という政治プロジェクト―インドネシアの事例」日本比較政治学会 2010 年度研究大会、東京外国語大学、2010 年 6 月 19 日。

(3) 狐崎知己「21 世紀のラテンアメリカ、ゼロ年代」日本ラテンアメリカ学会研究大会報告、京都大学、2010 年 6 月 6 日。

(4) Jun Honna, “Combating Human Trafficking in Southeast Asia: How Can Human Security Strategies be Adopted?” ASEAN ISIS-JICA Wokshop, "Mainstreaming Human Security in ASEAN Integration," Manila, April 17, 2010.

(5) Shinichi Takeuchi, “Gacaca in Rwanda: Its Meanings in Rural Society” African Studies Association, New Orleans, November 20, 2009.

(6) 月村太郎「内戦後の旧ユーゴ諸国とＥＵ加盟―その展望とジレンマ」日本政治学会 2009 年度研究会、日本大学法学部、2009 年 10 月 10 日。

(7) 狐崎知己「ポスト・ジェノサイド社会を生きる人たち―和解のための諸条件とオーラリティの役割」日本オーラルヒストリー学会、慶應義塾大学、2008 年 10 月 12 日。

(8) 武内進一「ルワンダのジェノサイド―民間人の動員をめぐって」日本平和学会 2008 年度春季研究大会、東京女子大学、2008 年 6 月 15 日。

〔図書〕（計 29 件）

(1) Noriko Kawamura, Yoichiro Murakami, and Shin Chiba (eds.), *Building New Pathways to Peace* (University of Washington Press, 2011), 312pp.

(2) Shin Chiba (Terrell Carver and Jens Bartelson eds.), *Globality, Democracy, and Civil Society* (Routledge, 2010), pp.172-188.

(3) 根本敬『抵抗と協力のはざま―近代ビルマ史のなかのイギリスと日本』岩波書店、2010 年、306pp.

(4) Jun Honna (Edward Aspinall and Gerry van Klinken, eds.), *The State and Illegality in Indonesia* (KITLV Press, 2010), pp.261-279.
(5) Jun Honna (Edward Aspinall and Greg Fealy, eds.), *Soeharto's New Order and its Legacy: Essays in Honor of Harold Crouch* (ANU E-Press, 2010), pp.135-150.
(6) 千葉眞『「未完の革命」としての平和憲法』岩波書店、2009 年、262pp.
(7) 千葉眞編『平和の政治思想史』おうふう、2009 年、pp.67-99.
(8) 村上陽一郎・千葉眞編『平和と和解のグランドデザイン―東アジアにおける共生を求めて』風行社、2009 年、pp.27-47 および pp.289-317.
(9) 武内進一『現代アフリカの紛争と国家―ポストコロニアル家産制国家とルワンダ・ジェノサイド』明石書店、2009 年、464pp.
(10) 月村太郎（大芝亮他責任編集）『日本の国際政治学２　国境なき国際政治』有斐閣、2009 年、pp.115-134.
(11) 武内進一編『戦争と平和の間―紛争勃発後のアフリカと国際社会』アジア経済研究所、2008 年、400+xixpp.
(12) Shin Chiba and Thomas J. Schoenbaum (eds.), *Peace Movements and Pacifism after September 11* (Edward Elgar, 2008). 232pp.
(13) Shin Chiba (Yoichiro Murakami et al., eds.), *A Grand Design for Peace and Reconciliation: Achieving Kyosei in East Asia* (Edward Elgar, 2008), pp.14-27 and 176-197.
(14) Jun Honna (Marco Bunte et al., eds.), *Democratization in Post-Suharto Indonesia* (Routledge, 2008), pp.226-247.

６．研究組織

(1)研究代表者

大串　和雄（OHGUSHI KAZUO）
東京大学・大学院法学政治学研究科・教授
研究者番号：90211101

(2)研究分担者

千葉　眞（CHIBA SHIN）
国際基督教大学・教養学部・教授
研究者番号：10171943
本名　純（HONNA JUN）
立命館大学・国際関係学部・教授
研究者番号：10330010
（H20：連携研究者）
月村　太郎（TSUKIMURA TARO）
同志社大学・政策学部・教授
研究者番号：70163780
根本　敬（NEMOTO KEI）
上智大学・外国語学部・教授
研究者番号：90228289
狐崎　知己（KOZAKI TOMOMI）
専修大学・経済学部・教授
研究者番号：70234747
木村　正俊（KIMURA MASATOSHI）
法政大学・法学部・教授
研究者番号：70308097
武内　進一（TAKEUCHI SHINICHI）
独立行政法人国際協力機構・JICA 研究所・上席研究員
研究者番号：60450459
（H21→22：研究協力者）